

## 第一章

### 私たちはすでに成人以降の心の発達を何か知っている

私たちは自分の人生を歩みながら、すでに人間の心の発達に関する多くの情報を無意識的にあるいは意識的に集めています。特に幼児期から少年期そして青年期にかけての成功や失敗などの記憶は、私たちにとって多かれ少なかれ非常に鮮明なものです。もしかしたら少年期や青年期の思い出に浸ることがあるかもしれませんが、私たちは毎日、**成人**としてみなされているのです。私たちが発達段階のどこに位置しようとも、成人以降の心の発達を社会科学に則って学習することは意義があります。

心の発達における危機を経験した人、人生の大きなターニング・ポイントを迎えた人などを除いて、多くの人たちにとって自分自身の心の発達について思いを巡らせることは少ないため、**成人以降の心の発達**という言葉はあまり馴染みのないものかもしれません。それゆえに、成人以降の心の発達は人間の「隠された領域」となってしまったのです。不幸にもこの事実は私たちの人生においてだけではなく、発達論の知識が大いに役立つ心の支援を扱うプロフェッショナルにも当てはまります。

#### 人間の心の隠された領域

本書の意図は、心の隠された領域を解明する旅に皆さんをいざなうことです。そして本書は、心の成長に関わる全ての人—コンサルタント、ソーシャルワーカー、心理学者、交渉（紛争）仲裁人、コーチ、**HR** プロフェッショナルなど—のためにあります。「成人以降の心の発達」という言葉が暗に示している通り、その発達は少年期そして青年期の発達とは大きく異なってきます。その理由は数多く存在しますが、最も重要なことは、成人は身体的には成熟期を終えています、意識の進化・発達は生涯を通じて行われるということです。言い換えれば、身体的な成熟を遂げた **25 歳** を迎えて、ようやく成人としての意識の発達が始まったとも言えます。

興味深いことに、発達理論の研究成果によって、成人の意識は線形的ではなく非連続的に発達していくことがわかっています。そのため成人の意識は段階状に発達すると言えます。発達段階は人間の一生における成長曲線のある地点に位置し、段階が変わればこれまで知っていた「世界」が突如として、劇的に変貌を遂げます。それは異なる世界であって、本人にとって全く新しい世界であると言えます。時に私たちは新しい発達段階へ移行するための助けが必要でしょうし、またある時は自分の力でそこに辿り着こうとするかもしれません。またある時には新しい成長段階へ留まるために他者の助けが必要となってくるかもしれません。これらの話は皆さんにとって馴染みのあるものでしょうか？

この時点で皆さんにとって不明瞭なことは、成人以降の心の発達を理解するための専門的な語彙だと思いますが、本書はそれらの語彙を分かりやすく解説しています。平易な語彙および数字を用いた表記法を用いることで、私たちが現在抱えている課題、他者との人間関係上で起こっていること、そして仕事においてどのように意思決定をしていけばよいのかという問題などを理解するのに役立ちます。またそれらの語彙や表記法は自分の心の成長段階を理解するためだけではなく、クライアントの発達段階を理解するための聴く技術を向上させてくれます。ここで「言語は成人以降の心の発達とどのような関係があるのか？」という疑問を持たれる方もいらっしゃるかと思います。

その質問に対する回答としては下記の通りです。まず、発達論の専門家が聞き取ろうとするのは人々が話す内容ではなく、彼らがどのように言語を用いるかというその方法です。いわば、人々が話していることというのは表面構造にすぎず、実際にはどのように現実世界を構築するのかということに関連する、隠れた**深い構造**が私たちの心の中に存在するのです。この隠れた深い構造は、単にそれが目に見えないからというだけではなく、人々が思考し、感じ、他者と関わり、そして何をすべきか、なぜそれをすべきか、そして誰のためにそれをするのかという意思決定を生み出す**意識構造の重心**を反映しているため、隠れた深い構造と呼ばれているのです。また、意識構造の重心は人々がすることすべてに色彩を加える（特色を与える）機能と同義です。こうした重心構造は当人にとってのコンフォートゾーンであり、目に見えることはなく、支配することもできません。これから本書を通じて見ていくことではありますが、人々は現在の意識構造の重心に強く支配されているのです。

なぜ私たちは意識構造の重心に強く支配されていると言えるのでしょうか？なぜなら私たちは、自分では理解しえないものによってコントロールされているからです。それは手に取って眺めることができるものではなく、内省の対象となりうるものでもないのです。実際には、現在の発達段階から抜け出した時、すなわち高次の段階へ成長を遂げた時にしか、意識構造の重心を見ることはできないのです（もちろんここで見ることもできる意識構造は現在のものではなく、以前の意識構造です）。これはハイデガーが人間の条件として「ある（存在する）」ことを挙げたのと同様に、私たちには選択の余地はなく、私たちはその発達段階に存在するという、ただそれだけなのです。

クライアントを支援するプロフェッショナルとして、こうした考え方はなぜ重要になってくるのでしょうか？クライアントについて見えないこと、わからないことがあっては十分なサービスを提供できないことは明白です。当然、プロフェッショナルは、クライアントが取り除くことのできない盲点の影響を受けるかもしれませんが、私たちはクライアント

よりも盲点を認識することができる、より大きな機会を有しています。発達論に関わる語彙や数字を用いた表記法に親しみ、心の発達に関する理論的フレームワークを理解することがまさにそうした機会なのです。

それでは少し詳細に移っていきましょう。ここではこれから話していく内容の概要を掴んでいただくため、生涯を通じた心の発達過程を示した下記の図を見ていただきたいと思います（キーガン、1982、p.134）。

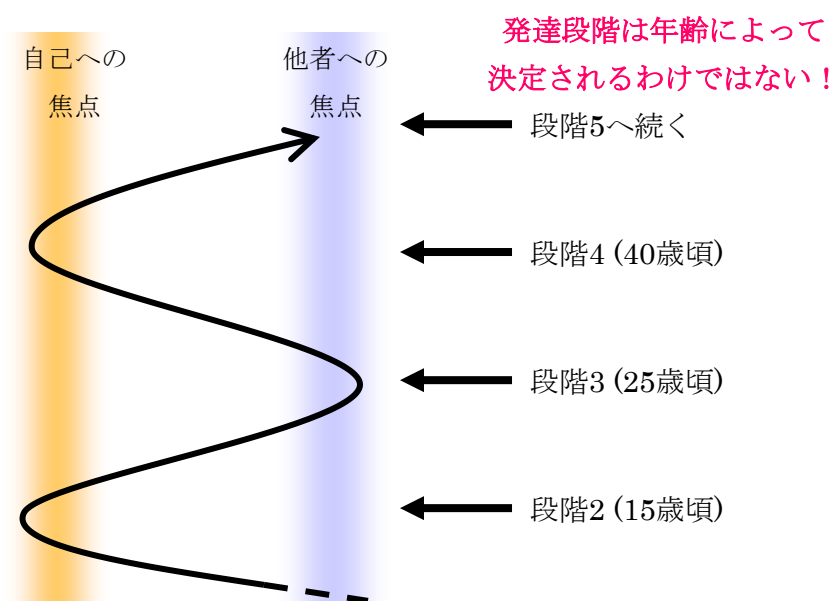


図 1.1 : 心の発達の螺旋構造

### 心の発達という旅路

心の発達はある種の旅と喩えられます。この旅は、生涯を通じて二つの相矛盾する傾向と向き合っていく過程であるとも言えます。一つには自立した自己を確立する必要性と、もう一つには集団に帰属する必要性という二つの矛盾です。図 1.1.が示すように、心の発達過程において、私たちはそのどちらか一方に焦点を当てます。こうした振動運動こそがまさに社会的・感情的生活を定義するのです。

そして注意を要することは、発達段階は生物学的年齢と関係するわけではありません。20歳の人間に発達段階5の成熟度を求めることは通例行われたいのと同様に、年齢は単に境界を定める変数でしかありません。また30代の方が50代の人よりも精神的に成熟しているということがあるように、年齢は発達段階を決定する主要因とはなりません。

それでは図 1.1.を詳しく見てみましょう。図をご覧になって分かる通り、段階2から段階5

へ移行する動きにはある共通点があります。段階 2 と 4 は自己に関心を向けるのに対して、段階 3 と 5 は他者に関心を向けます。これからそれらがどうして起こるのかについて見ていきますが、自己に中心を置くのと他者に中心を置くのとでは、自己の在り方に大きな違いがあることをまずは頭に入れておいてください。

ここで皆さんの中には「どうして発達段階 5 で終わりなのですか？」と尋ねる方がおられるかもしれません。手短な回答として、発達段階 5 以上の段階については実証的なデータを得ることが極めて困難であるため、発達段階 5 は社会科学の研究における現段階の限界地点なのです。もちろん、段階 5 よりも先の発達段階を研究している研究者も存在します（例えばクック・グロイターなど）。しかし、本書ではキーガンの理論に則って議論を進めていきます。

図 1.1. が示す発達の推進力を理解するために大切なことが二つあります。一つ目は、低次の段階から高次の段階へ移行する発達運動は、決して終わりのないものであるということです（発達の潜在能力が欠如している場合や肉体的な死を除く）。そして二つ目は、一つ手前の段階、例えば**発達段階 2 を経ることなく発達段階 3 へ移行することは起こり得ない**ということです。また、**発達段階 2 から 3 へ瞬時に移行することも起こり得ない**ということも理解することも重要です。

実際に、一つの主要な発達段階から次の主要な発達段階の間に存在する 4 つの移行段階を見ていきます。結局のところ、私たちはこれから計 16 個の発達段階の特徴を見ていくことになります。誰も一つの発達段階に依拠して生きているわけではありません。典型的には、3 つから 5 つの発達段階（大抵の場合 3 つ）に基づいて現実世界を生きているのです。

少し難解な点を指摘するならば、社会科学の研究は一般的に、人々がどのように行動し、どのように現実世界を経験するのかという、ある一時点を映し出すスナップショットに似ています。図 1.1. はそれとは別の観点に基づいています。成人以降の心というものが、何十年にもわたる長大な時間をかけて緩やかに発達していくという理解を初めて、人々の人生において何が起きているのかを把握することができるのです。

スナップショットを撮影するような典型的な分析を用いると、こうした長大な時間をかけて行われる心の発達過程を見逃してしまうことになりかねません。本書で解説する、**長大な時間をかけて行われる目には見えないパターン（発達論に精通していない者には見えないパターン）**がまさしく人間の心の発達構造なのです。

## 発達段階の推移

発達段階の特徴を理解することは技術であると共にある種の芸術と言えます。発達段階の理解は技術であるため、学習することが可能です。下記の表を見ながら発達段階の学習を早速始めましょう。表 1.1.は主要な発達段階の特徴を示しています。

発達段階の変遷	段階 2 手段・道具的段階	段階 3 他者依存段階	段階 4 自己著述段階	段階 5 自己認識段階
他者の捉え方	自己の欲求を満たすための手段・道具	自己イメージを形成するために必要なもの	協力者、同僚・仲間	自己の変容に貢献する者
自己洞察	低	中	高	とても高い
価値観	弱肉強食	コミュニティ	自己決定	人間性・慈悲心
欲求	他者の欲求を退けること	集団や組織に従属すること	自己の独自の価値観を求めること	責任と限界を結びつけて自己を捉えること
支配欲求	とても高い	中	低	とても低い
コミュニケーション	一方向	1対1の交換	対話	真のコミュニケーション
組織における地位・役割	出世第一主義者	善き市民	マネジャー	リーダー

表 1.1：生涯を通じた発達段階の変遷

上記の表は各発達段階の主要な特徴を示しています。この表をご覧になって分かる通り、他者の捉え方、自己認識、価値観、欲求、支配欲求、コミュニケーションは全て段階ごとに異なる特徴を持っており、また組織における振る舞い方も段階ごとに異なってきます。確かに上記の表における段階ごとの特徴には謎めいた言葉が含まれているかもしれませんが、それらは各発達段階の大まかな特徴を掴んでもらうために、意図的にそのような表現にしています。

## 意味構築

「それでは一体、それらの発達段階の違いを生みだしているものは何なのか？」という質問をする方がいらっしゃるかもしれません。それは本書の中心テーマであるため、この質問は大変すばらしいと思います。そしてその答えとしては、それらの発達段階の違いの根底にあるものは**意味構築活動**です。意味構築活動とは人々が自分の発達段階に合わせて、

自分の人生あるいは仕事に独自の意味を築き上げる方法のことです。キーガンは、人間であることと意味構築者であることは同じ意味であると述べています。

意味構築活動は心の中で現実世界を構築するためのなくてはならない手段であり、こうした見方は**構成主義**的な観点と言えます。私たちが知っていようと知るまいと、日常行っている全ての活動はこの意味構築活動というプロセスに基づいているのです。私たちが、自分・他者・置かれている状況に対して、意味構築活動を止めることは肉体的な死を除いて現実的に不可能です。

つまり、意味構築活動は社会的・感情的発達にとって、なくてはならないものなのです。

### 生涯に渡る心の成長における他者の捉え方と自己洞察

生涯を通じた心の発達過程を見ていくに際して、まず始めに表 1.1 で示した項目の内、他者の捉え方および自己洞察の二つを見ていきましょう。それら二つは社会的・感情的成熟における際立った特徴を表しています。

発達段階の変遷	段階 2 手段・道具的段階	段階 3 他者依存段階	段階 4 自己著述段階	段階 5 自己認識段階
他者の捉え方	自己の欲求を満たすための手段・道具	自己イメージを形成するために必要なもの	協力者、同僚・仲間	自己の変容に貢献する者
自己洞察	低	中	高	とても高い

表 1.2 : 生涯を通じた他者の捉え方及び自己洞察の発達

表 1.2 を見ると、私たちの他者の捉え方（あるいは他者の扱い方）は自己洞察の発達段階に大きく依存していることがわかります。人間関係における倫理観も同様のことが言えます。自己洞察というのは実のところ、上記の表が示しているような単に「低い」「とても高い」などで表されるものではありません。むしろ自己洞察の発達は脳の発達に依存しており、その制限を受けていることを忘れてはなりません。

25 歳の年齢に達する以前は、人間の脳は形式的論理思考を十分に獲得することができません。また形式的論理思考をきちんと身に付けていない人にとって、仮に他者を自分の欲求に基づいて道具のように扱ったとしても、それが（恐らく法的に）罰せられるということを実際の意味で「学ぶ」こともまた不可能なのです。しかしながら、発達段階 2 に基づいて

行動することは単に心理学的な問題ではなく、人間の認識の仕方を扱う認識論的な問題なのです。

発達段階 2 の人々は単一的な視点しかとることができません。そして、こうした認知的な限界は、彼らが観察されるがままに行動するということを表しており、そうした特徴は 10 代の子供に頻繁に見受けられます。

表 1.1. が示しているように、自己洞察の低い発達段階はおおよそ青年期後期頃に芽生え、それゆえに彼らは、他者を自己の欲求を満たすための道具のように捉える傾向にあります（企業人の中においてもこのような特徴の人々は数多く見受けられます。例えばエンロン事件などは、この発達段階の特徴を備えた大人が起こした事件であるという見方もできます）。こうした認識の枠組みから抜け出す方法は、他者の視点を保持できるようになることです。自己の視点と他者の視点を同時に保持することは自己洞察の段階を押し上げ、他者の捉え方を変えることにつながります。

こうした意味において、発達段階 3 の人々は内面的に他者に依存しています。キーガンの用語を用いれば、**他者依存段階**と言えます。これは嘆くことではありません。表 1.1. が示す発達段階 3 の特徴の通り、他者依存段階にいる人々は集団の核になります。また、彼らは他者をコントロールしようとする強い欲求をそれほど持たず、チームのメンバーとして役割を果たすことができます。彼らは典型的な「**善良な市民**」と言えます。

これまでのところ、発達段階の違いに関する大まかな差異を理解してもらうために「抽象的な」説明しかしていません。ここで私は人々に関する分類について扱っているに過ぎないということを頭の片隅において入れておいてください。人間というのは発達段階それ自体「ではなく」、それらを知らずに人生のその瞬間を生きているのです。実際に数百万人もの人々が同じ発達段階に属し、それら全ての人はい行動的にも文化的にも全く異なっています。それでも発達段階を知るということは、人々が何を求め、彼らの社会生活における限界が何であるのかに関して多くのことを私たちに教えてくれることは否定できません。

それではどのような人々が発達段階 4 に属していると言えるのでしょうか？他者の期待に応じて自己を定義することを超えるために必要なことは何でしょうか？それは物事を独自の視点で捉えること、そして他者に依存することなく、物事を独自のやり方で行うことであると推測されたかと思います。

それは発達段階 2 の特徴なのではないか？と尋ねる方もいるでしょう。しかしながらそれは違います。なぜなら発達段階 2 において、焦点は自分自身の欲求や願望であるのに

対し、発達段階 4 においては自己の価値観に当てられるからです。もちろんながら、発達段階 4 の人々も自分の欲求や願望と結びついています。彼らはより高度な規範を心のうちに秘めています。他者に対して、自己とは異なる独自の存在として敬意を表するだけでなく、他者を仲間や同僚として捉えることができます。発達段階 4 の人々は他者との対話に自分を開き、自分自身を合理的に律することができます。また仕事において他者をうまくマネジメントすることができます。そして他者との関わり合いを通じて、彼らは自己の独自性を認識し、それと同時に独力で道を歩むことに犠牲を払おうとします。こうした意味において、自己洞察は発達段階 2 と比べて非常に高いと言えます。

それでは、発達段階 4 に到達した人々にとって、発達段階 5（自己認識段階）のように振る舞うには何が欠けているのでしょうか？

これまで説明してきたように人間は現在の発達段階の支配下（影響下）にあり、それは発達段階 4 に関しても同様です。彼らは、自分自身が閉じ込められている自分の価値観という名の檻を見ることはできません。つまり、彼らは過去に成し遂げた業績や成功などによって自分自身を過剰に定義しすぎています。それゆえに、彼らは人生や仕事における自分の至らない点に嘆き、自分の限界（往々にして他者に指摘された点）を押し広げようとする方法を必死に学ぼうとします。

自己著述段階（発達段階 4）の人々は十分に謙虚ではないということだけではなく、より大きな見取り図を描くことも往々にして困難です（もちろんこうした能力はその人自身の認知的発達に依存していますが）。彼らは他者に対して十分に協力的ではなく、自分と違う見方で世界を認識する人に対して非協力的な傾向にあります。また、彼らは他者をマネジメントすることはできますが、他者をリードし、動機付けすることはできません。そして彼らは自らの利益に反する場合、他者の成長を支援することもできません。

ご覧の通り、発達段階が高度に発達していくにつれ、人生が必ずしも容易になったり、良くなったりすることはないのです。発達とは、私たちの喜びや悲しみがこれまでのものとは異なり、自分自身のこれまでの成功や業績を保持しながらも、自分が宇宙におけるほんの一片であるというより明確な認識を獲得していくこと、ただそれだけなのです。心が発達していくにつれ、死が訪れるまで私たちにとって世界はより一層大きな対象物となっていきます。幸運に恵まれれば（心が極限まで高度に発達すれば）、私たちは人生における悲劇、喜劇、苦難、人生の素晴らしい美しさ、そして私たち自身の人生の美と儚さを含めた全てを知って死ぬことができるでしょう。

それでは現在までの発達論の研究成果が示す、いくつかの統計的データを見てみることに



しましょう（クック・グロイター、1999、p.35）。

### 成人以降の心の発達に関する統計データ

組織における地位・役割	成人に占める割合 (%)	簡潔な特徴
段階 2：出世第一主義	10	手段・道具的
段階 3：組織への貢献者	55	他者依存
段階 4：マネジャー	25	自己著述
段階 5：リーダー	<10	自己認識

表 1.3.：成人における心の発達段階に関する統計データ

上記の表を要約すると下記ようになります。

- 多くの成人は発達段階 3 に達していない（他者依存段階）。
- 全ての成人人口の内、せいぜい 25%の者が発達段階 4 に到達している（自己著述段階）。
- 自己認識段階に到達している者は 10%にも満たない。

この結果を見て驚いた方もいるかと思いますが、社会は全ての発達段階の人間を必要としているということを忘れないでください。私たちは、この世界が全てリーダーで埋め尽くされてしまう光景を想像することはできないでしょう。仮に全ての人間がリーダーならば、それらのリーダーは誰を率いていくのでしょうか？もし私たちが平坦ではなく、階層的な世界（宇宙）構造と向き合っていくのならば、この統計データはプロセス・コンサルタントにとっていくつかの恩恵があります。一つには、人々は発達段階 3 を超え、発達段階 4 に到達しなければならないという**社会的な要求事項**といったものがないことです。つまり自分自身で犠牲を払い、自らそこに到達するようにしなければ、発達段階 4 には至らないということです。

私たちが仮に発達段階 3 に到達していれば、善良な市民を求める社会はそれで満足です。慣習を重んじる発達段階 3 を超えることは私たち自身に委ねられています。これは、私が本書で述べている人間の条件のもう一つの側面です。重要なことは、発達段階を決定する要因は教育でも身体的な年齢でもないということです。これら二つの要因は発達段階を推測する非常に弱い変数です。発達段階に関する一番の予測材料は、自然言語を通じて現れる人間の意識段階です。

キーガンが詳細に述べているように、こうした世界の認識の仕方に関する認識論的状况は、

現代社会とその構成員に多くの問題を突き付けています。プロフェッショナルと称される大抵の職業は少なくとも発達段階 4 の成熟度合いが要求されていますが、多くのプロフェッショナルはこの段階に到達していないため、彼らは自分の仕事が「理解のできない世界」となってしまうのです。

こうした文脈において、コーチングという職業は起こるべくして起きたと言えます。北米における自己啓発ムーブメントの結果として、コーチングは社会的な要求事項ではなく、人々が自己著述段階（段階 4）に成長することを促す社会的な支援機能を担うことが期待されて登場しました。ここで私たちは、はたしてコーチングはその機能を十分に担っているのかということの考察する必要があります。明白なことは、自己著述段階に至っていないコーチは他者を発達段階 4 へ向かう旅へと支援することなどできないということです。

十中八九、多くのコーチは自分自身を発達段階 3 から 4 へと成長させるために、自分のプロフェッショナルな職業に従事していると思います。これは聞こえが悪いかもしれませんが、まるで「盲目の人が盲目の人を導く」という状況と似ています（コーチングにまつわるこれらの問題は第 9 章で詳しく論じています）。

## 認知的発達プロフィール

第二巻で焦点を当てているトピックは人間の認知的発達プロフィールです。

成人の社会的・感情的発達ほど複雑な物事を考えることができるか、そしてどれほどシステム的に思考することができるかということと強い相関関係があります。その相関係数は 0.6 という研究結果があり、この数字は社会科学の観点から見ると非常に高い値であると言えます。相関関係は因果関係ではないため、社会的・感情的発達と認知的発達のどちらがもう一方の発達を促す役割を果たすのかは明らかではありません。高度に発達した認知的プロフィールは社会的・感情的発達を促すのでしょうか？あるいは逆に、社会的・感情的プロフィールが認知的発達を促すのでしょうか？

ここで言えることは、それら二つの発達領域は互いに分けることのできないものだという事です。社会的・感情的発達と認知的発達は不可分であるということを理解することは、心の発達支援に携わる者にとって重要であり、この点は特に頭に留めておいてください。

## ここまでの要約

本章では、生涯にわたる成人以降の心の発達過程に関する基本的な概念を紹介してきまし

た。これまで紹介してきた考え方は未知のものであったかもしれませんが、世間が当たり前と思っている前提と矛盾していたかもしれません。だからこそ、成人以降の心の発達という考え方は「隠された」観点なのです。しかしながら、これらの考え方は 50 年を超す研究成果に基づいて提起されているものです。それらは**コーチング研究**においてようやく注目されるようになった発見事項なのです。

ここで一度、これまで学習してきた内容を簡単に要約します。

1. 現実社会は発達段階という隠された階層構造で構築されている。
2. 人間の喜び、問題、困難などは発達段階に応じて異なる（発達段階が高次になるにつれて、必ずしも改善されるというわけではない）。
3. 社会的・感情的発達段階は計 16 個ある。
4. 私たちは単一の発達段階に基づいて生きているわけではなく、意識構造の重心を中心に、それよりも一つ低い段階および高い段階に基づいて生きている。
5. 高度な発達段階に移行する潜在能力は各人によって大きく異なる。
6. 幾人かの人々は、自らの発達段階の限界に 50 代、60 代、70 代、あるいは 80 代で到達するかもしれない—そして幾人かの人々は、自分の発達段階の限界に到達する前に死を迎えるかもしれない。
7. 社会的・感情的発達段階の人口分布は段階 3(他者依存段階)に集中している(55%)。プロフェッショナルは少なくとも発達段階 4 に到達することが求められているため、こうした現状は現代社会の一つの問題となっている。
8. 年齢や教育は発達段階の成長を推測する主要因ではない。
9. 心の発達支援を行うプロフェッショナルは、成人以降の心の発達を支援するためのツールや方法論を紹介する者と社会からみなされているかもしれない。
10. 心の発達支援を行うプロフェッショナルが社会において効果的な力となれるかどうかは、自分自身の心の発達に依存している。

## 発達段階アセスメントの測定範囲

発達段階についてこれまで述べてきたことを、より包括的な観点から捉え直していきます。発達論に基づいた私のコーチング経験からすると、社会的・感情的発達の知識だけに基づいてサービスを提供することは不十分であると強調しておく必要があります。

なぜなら、クライアントは社会的・感情的発達だけではなく、認知的な発達も同時に経験しているからです。認知的な発達は、本質的に形式的論理思考から弁証法思考への移行に関係する発達領域であることをもう一度述べておきます。

二つの発達領域は互いに関連し合っていますが、社会的・感情的発達はクライアントが何をすべきかを「考える」ことに関係し、認知的発達はクライアントが何をできるかを「考える」こととどのように世界において意味を理解するかということに関係しています。それゆえに、二つは互いに関連し合っているながらも異なるものなのです。

### 水平的・垂直的な測定

人間の発達に関して水平的な領域を眺めるだけではなく、垂直的な領域に焦点を当てると、人間の隠された領域がより鮮明になってきます。発達段階という成長パターンは垂直的領域に関係しています。そのような心の発達パターンを明瞭にするためには、実証的なデータを集めること、およびそうしたデータを実際の介入の方法の中で検証することが必要となってきます。

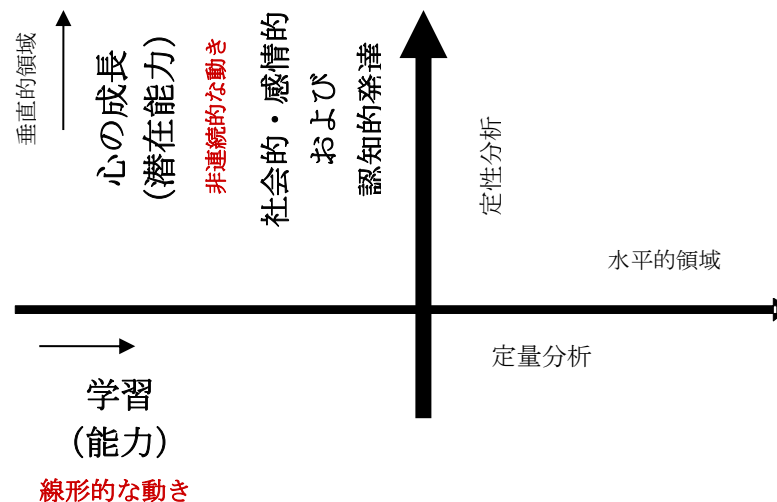


図 1.2：垂直的・発達の領域と水平的・行動的領域

上記の図が示している通り、クライアントの行動は一般に線形的な動きを表し、行動は学習によって変化します。それとは対照的に、クライアントの心の成長は非線形的な動きであり、学習によって発達するとは限りません。むしろ心の成長は学習を生み出すものになり得ますし、学習を阻害するものにもなり得ます。

水平的領域と垂直的領域の違いは何かというと、一つと同じ水平的（行動的）な事実やデータに対して、多くの異なる垂直的（発達の）解釈がなされるということです。例えば、タイムマネジメントに難を抱えるクライアントが二人いたとして、それらのクライアントは一見同じ課題に直面しているように見えます。しかし、彼らは自分自身の認知的な発達

度合い、および社会的・感情的発達度合いの影響を受けており、その問題に対する認識の仕方や解釈の仕方などが大きく異なってくるのです。

クライアントに対する支援策はクライアントの発達段階に応じて異なってくるため、クライアントの発達プロファイルを知ることは非常に重要になります。それゆえに、エニアグラムや MBTI のような性格類型テスト（水平的領域におけるアセスメント）だけでは、クライアントの支援策を考えるにあたって不十分であると言えます。例えば、エニアグラムのタイプ 8 が意味していることは、クライアントの垂直的な発達段階に依存しているのです。行動領域・発達領域を共に考慮するプロセス・コンサルタントにとって、エニアグラムにおける発見事項はあまりに一般的な（大まかな）内容すぎるため、あまり重要な役割を果たさないことがあります。

これまでの内容を要約すると、垂直的領域の評価測定と水平的領域の評価測定を区別する際に重要なことは、前者が**行動の原因**を分析するのに対し、後者は単に**行動の症状**を分析するということです。それゆえに、私たちがクライアントに対して 360 度評価（行動的分析）を用いる際には、発達の分析も行う必要があります。包括的な評価・分析を行うためには、社会的・感情的発達を評価するためのアセスメント、そしてもう一つには認知的発達を評価するためのアセスメントを行うことが重要です。下記の図 1.3 は IDM におけるプログラム 1、2、3 および『心の隠された領域の測定』第一・二巻においてそれらのアセスメントが統合されていることを示しています。

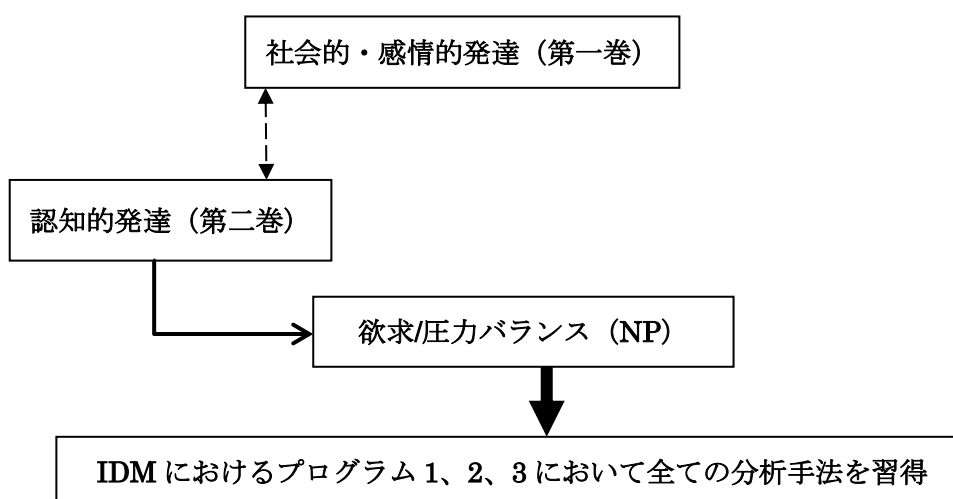


図 1.3 : 心の三つの領域と IDM における教育プログラムとの関係

本書（第一巻）は社会的・感情的発達に焦点を当てているのに対し、第二巻は認知的発達に焦点を当てています。そして教育的な観点から述べると、それらの書籍は IDM のプログ

ラム 1、2、3 における主要なテキストになっています。

上記の図が示している「欲求/圧力バランス」は本書の第 10 章で取り上げています。これは職場における個人の心理バランスを表すものであり、特に自己の振る舞い、職務に対する姿勢、および感情的知性（対人関係的観点）の三つを扱っています。

欲求/圧力分析は質問表に基づいて行われ、クライアントの回答は彼らの**行動特性**を浮き上がらせます。分析結果はクライアントに対してフィードバックする際に非常に重要な情報となり、コーチングのゴールを設定する際にも大切になってきます。

欲求/圧力質問表の使い方と評価・分析の仕方はプログラム 3 で学ぶことができ、実際にケーススタディを行うプログラム 5 において、二つの発達測定インタビュー手法と欲求/圧力質問表が統合されることとなります。欲求/圧力質問表の詳細に関してはこちらのウェブサイトを参照してください。[www.needpress.com](http://www.needpress.com)

構成主義的発達論のフレームワーク（CDF）を学習することに関して、上述の三つの領域（社会的・感情的発達、認知的発達、欲求/圧力分析）を統合することは初めての試みであり、それは始まったばかりの試みでもあります。それら三つの領域を統合するためには、三つの領域全ての相互関連性を考えることのできる弁証法思考が要求されます。IDM のプログラム V で三つのケーススタディを書き上げる頃には、CDF を自由自在に使いこなせるようになっているでしょう。

下記の図は IDM におけるプログラム I-V の概略と関係性を示しています。

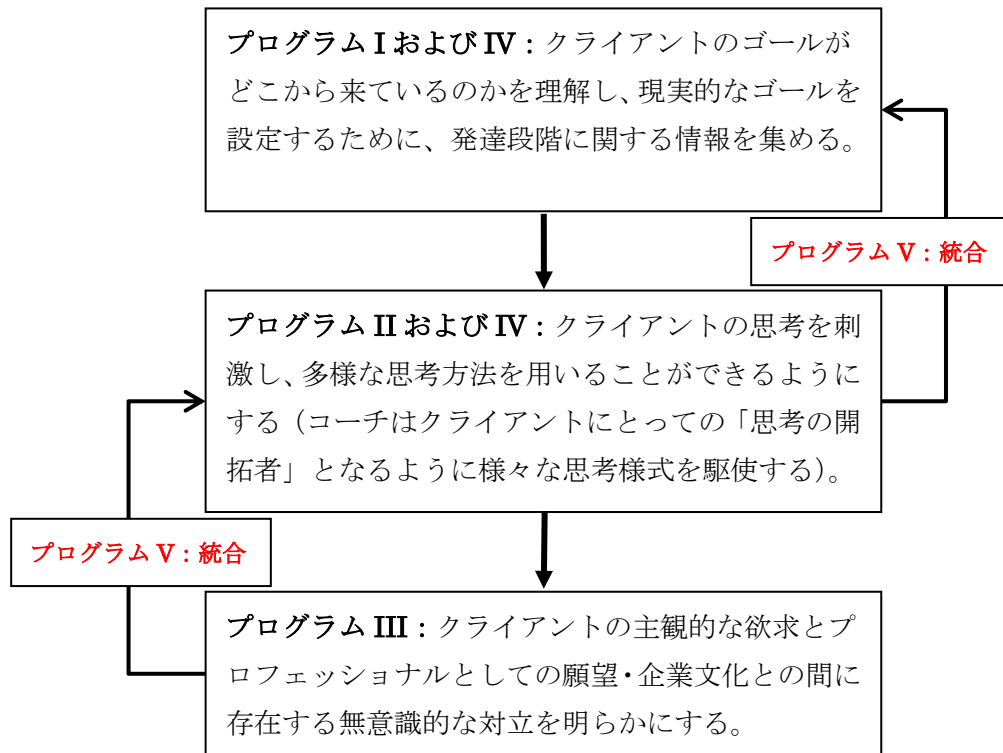


図 1.4 : クライアントを理解するための三つのステップ

## 復習問題

本書における全ての章の最後に、皆さんが各々の章の内容を確認し、その理解をより深めていただけるように復習問題を設けました。これらの復習問題は添付資料のエクササイズとは異なる内容になっています。

1. 過去10年を振り返り、下記の事柄をいつ頃に習得したかを考察してみてください。
  - (a) 自己認識（自分に対する認識）
  - (b) 他者認識（他者に対する認識）
  - (c) この世界がどのように動いているのかに関する理解
2. これまでのところ、あなたはどのようにクライアントの発達段階を見分けていますか？
3. もしあなたの推測（直感）においてクライアントがあなたよりも高度に発達していた場合、あなたは何をしますか？
4. 同じ年齢にも関わらず、発達段階に相違があることに関するあなたの考えは何でしょうか？あなたの専門分野においてそれらの差異をどのように取り扱っていきますか？

添付資料Aにおいて皆さんの理解をさらに深めるためのエクササイズが用意してあります。